効果的な小児慢性特定疾患治療研究事業推進に関する研究
（小児慢性特定疾患治療（喘息）の医療意見書作成について）

研究協力者　森川昭廣　　群馬大学医学部小児科
岩田　力　　東京大学附属病院分院小児科
永倉俊和　　東京慈恵会医科大学第三病院小児科

研究要旨　　小児慢性特定疾患治療（喘息）の新しい医療意見書５９件について、各項目の内容とその記載率を検討し、本研究事業推進に必要な事項について検討するとともに、現場において意見書に記載しやすい項目にする工夫について考察した。

A. 研究目的

小児気管支喘息治療マニュアル作成とともに医療意見書の改訂を行い、その記載内容ならびにその頻度について調査し、さらに効果的に医療意見書を作成しうる注意点について検討を加えた。

B. 研究方法

平成１０年4月１日より岐阜、静岡、三重、佐賀、宮崎の各県に提出された計５９名分の医療意見書の各項目について検討した。

C. 研究結果

1）男女、年齢の記載について

男３５件(59.3%)、女２２件(37.3%)、無記入２件(3.4%)で、９６.６%の例については記載されていた。年齢については、乳児期２件、幼児期５件、学童期３０件、それ以降４件計５３件(89.8%)であり、無記入は６件(10.2%)であった。

2）重症度

軽症１件(1.7%)、中等症２６件(44.1%)、重症３０件(50.8%)であり、まったく記載されていないもの２件(3.4%)であった。

3）治療点数

記載のあったものは３３件(55.9%)であり、記載のなかったものは２６件(44.1%)であった。

4）検査結果

IgEについては５９件中５２件(88.1%)が施行しており、記載されていた。一方無記入のものが７件(11.9%)みられた。RASTも５９件中４８件(81.4%)で施行し、記載されているが、１１件(18.6%)で記載がなかった。末梢血好酸球は５１件(86.4%)で記載されており、８件(13.6%)で無記入であった。また、喀痰あるいは鼻汁中の好酸球数も３７件(62.7%)で記載されており、２２件(37.3%)で無記入であった。肺機能では５９件中４６件(78.0%)に記載があり、肺機能実施可能年齢（おおよそ＞７歳から）を考えるとほぼ全員に行われていた。PEFRもほぼ同様の結果であった。気道過敏性については５９件中４８件(81.4%)が未実施であった。

D. 考察

今回は集計しえた件数が少なく今後の集計が待たれるが、ここまでの調査について考察を行った。年齢、性別等の患者背景についてはほぼ９割が記載されているので大きな問題はないが、意見書受理時に再確認すべき点と考えられた。重症度については予想より記入率は高かったが、いまだその判定について十分に理解されていない部分もあり、今後さらに記載が容易なよう努力する必要がある。

治療点数は計算の繁雑さから記入率が低く、半数近くが無記入であった。

検査結果は、気道過敏性を除くとほぼ８０%が記載されているが、気道過敏性については逆に８０%が未実施であり、その施行に困難さがみられ、今後の医療意見書に記載すべきか否かについては検討する必要がある。

E. 結論

少数例の検討ではあるが、マニュアルとともに学術研究の資料となるように医療意見書が作成できたか、今後２、３の項目については検討が必要であり、特に必要事項と参考事項等について分ける必要があると考えられた。さらに、記載率向上のためには例を添付することが重要である。

なお、意見書受理時に基本的事項については記入されていることを必ずチェックする必要があろう。

検索用テキスト　OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

研究要旨　小児慢性特定疾患治療(喘息)の新しい医療意見書 59 件について、各項目の内容とその記載率を検討し、本研究事業推進に必要な事項について検討するとともに、現場において意見書に記載しやすい項目にする工夫について考察した。